非母語話者の文語文学習を支援するオンライン教材
―BUNGO-bun project 第 2 回研究会報告―

佐藤 勢紀子

要旨
非日本語母語話者を対象とする文語文教育について、関係者のネットワーク構築と情報共有を目指して、BUNGO-bun project を立ち上げ、2021 年 2 月にその第 2 回研究会をオンラインで開催した。大学関係者を中心に世界各地から 60 名の参加があり、「オンライン教材を考える」というテーマで 3 つの事例報告と討論が行われた。討論と事後アンケートの回答によって、特に日本研究の拠点校では非母語話者に対する系統的な文語文法教育が必要とされていることが浮き彫りになり、オンライン教材開発の取り組みへの評価とともに、研究会を継続開催し、さらに情報交換の機会を増やすことへの要望が寄せられた。

キーワード
非日本語母語話者、日本研究、文語文教育、オンライン教材

1. 研究会開催の経緯
1.1 研究の背景
日本語文語文を学ぶ必要のある非母語話者は、日本研究志望者を中心に世界各地に存在する。近年では、それに加えて日本の文化や歴史への関心の高まり、古典を題材としたサブカルチャーの人気、中国の「高校日語専業八級考試」(大学日本語専攻 8 級試験）での出題の影響などから、文語文に興味を持つ学習者が増えつつある（佐藤ほか近刊 a)。

その一方で、非母語話者に対する文語文教育の教育環境は、日本国外はもとより国内でも整っているとは言えない。日本では古文の基礎教育は中等教育で終わるため、留学生が大学や大学院で文語文法を系統的に学ぶ機会に恵まれるケースは稀である（佐藤 2015a, 2015b)。文語文教育に携わる教師に目を向けても、国内外を問わず、各自が閉じられた教育環境において手探りで孤独な作業を続けているというのが一般的な状況である。

1.2 BUNGO-bun project の開始
そのような現状をふまえて、報告者は非母語話者を対象とする文語文教育の関係者のネットワークを形成し、相互のノウハウを共有しつつ教育の質を高めていくこと、さらには文語文教育研修システムを構築することを目的として、2020 年 8 月に BUNGO-bun project を立ち上げた。そして、プロジェクトの活動の皮切りとして、同年 8 月 20 日に「オンライン化で生じた課題と可能性」というテーマで BUNGO-bun project 第 1 回研究会をオンラインで開催した。この研究会には大学教員を中心に 33 名（母語話者 22 名、非母語話者 11 名）が参加し、3 つの事例報告と討論が行われた（佐藤ほか近刊 b)。本短信では、それに続き 2021 年 2 月に開催した第 2 回研究会の概要と参加者の反応を報告する。

2. 研究会の概要

2.1 開催日時と参加者

BUNGO-bun project 第 2 回研究会は、2021 年 2 月 20 日（土）22:00〜24:00（日本時間）に Zoom によるオンラインで開催された。今回は東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センターの共催による開催であった。

開催に先立ち、第 1 回研究会終了後に立ち上げた bungonet[(1)]で連絡するとともに、報告者の研究協力者に参加を呼びかけ、EAJS や asagao のメーリングリストでも周知した。その結果、当日の参加者は 60 名に達した。特定できていない参加者 1 名を除いた内訳を示せば、母語では日本語 28 名、日本語以外 31 名、居住地では日本国内 30 名、国外 29 名、身分では大学教員 35 名、大学非常勤 9 名、元大学教員 3 名、大学院生／研究生 6 名、その他 6 名であった[(2)]。

2.2 プログラム

第 2 回研究会のプログラムは以下のとおりである。

第 1 部　事例報告―オンライン教材を考える

報告 1　“BUNGO-bun GO!”で何ができるか―教材公開に向けて
佐藤勢紀子（東北多文化アカデミー）・虫明美喜（宮城教育大学）・
角南北斗（フリーランス）

報告 2　古文ネット教材の構築から「脱構築」への文語教育
楊錦昌（Chin-Chang Yang）（輔仁大学）

報告 3　対話型学習環境の構築を目指して―「インターネット古文講座 KOBUN-Online」の構想と実践
楊暁捷（X. Jie Yang）（カルガリー大学）・
李康民（Kang-Min Yi）（漢陽大学校）

第 2 部　ディスカッション・情報交換

2.3 報告と討論の内容

ここでは、3 つの事例報告とそれに続く討論の内容をごく簡単に紹介する。

報告 1 は、2015 年度から開発が始まり、2020 年度内の公開が予定されているオンライン教材 “BUNGO-bun GO!”についての報告であった[(3)]。デモンストレーションを含む紹介と、同教材で何ができるかについての見通しの提示が行われた。

報告 2 は、2003 年から 2004 年にかけて構築されたネット教材「楊老師日文密巻」のうち「日本古典文学の巻」[(4)]をめぐる報告であった。同教材の紹介の後、その後の古典教育の展開[(5)]を通して、自作のネット教材のメンテナンスの難しさや他の多様なネット教材の出現によって同教材の位置づけが変化してきた経緯が語られた。

報告 3 は、文語文の自主学習のツールとして約 20 年前に開発された“KOBUN-Online”を中心とするオンライン教材についての報告であった[(6)]。最初に開発の経緯について李康民氏から紹介があり、その後、楊暁捷氏により同教材の構成・発想・応用についての報告が行われた。最近楊氏が開発したスマホアプリについての紹介もあった。

第 2 部では、3 つの報告をめぐる討論および情報交換が行われた。20 分弱の短いセッ

ションであったが、8 名の参加者の発言があった。オンライン教材の有用性に期待するコメントもあったが、主な論点は品詞分解に象徴されるシステマティックで厳密な文語文法教育の是非ということに集中した。特に欧米の日本研究拠点大学で文語文教育に携わる立場の参加者からは、文語文法の系統的な指導が必要であるという見解が一様に示された。

3. アンケートの結果

3.1 事後アンケートの実施

研究会終了直後に、参加者・録画視聴者計 62 名[7]を対象に Google Forms（無記名）もしくは E メールによるアンケートを実施した。質問は、1)母語（日本語／他）、2)身分、3)満足度、4)特に印象的だった点、5)～7)各事例報告についての感想や質問、8)研究会もしくは BUNGO-bun project についての感想や意見、の 8 項目とし、1)～4)の回答を必須とした。2 月末の時点で 40 名（母語話者 20 名、非母語話者 20 名）の参加者／録画視聴者からの回答があった。

3.2 アンケートの回答

まず、前項の質問 3)でたずねた研究会への満足度については、「満足できなかった」(＝1)から「とても満足した」(＝10)までの 10 段階のうち「10」を選んだ回答者が Google Forms での回答者 36 名[8]のうち 17 名（47.2%）、「8」～「10」を選んだ回答者が 30 名（83.3%）に達し、それ以外の回答者も「5」以上を選択していた。アンケート回答者の範囲内での結果ではあるが、全体に満足度が高かったことがわかる。

次に、質問 4)の特に印象的だった点としては、研究会のテーマであるオンライン教材開発への取り組みを評価する趣旨のコメントが 14 名からあったほか、13 名から（文語文法を教える必要性についての）議論が印象に残ったという趣旨の感想が寄せられた。また、8 名の回答者が世界各地から多数の参加者があったことを印象深く捉えていた。「常日ごろ悩んでいたことや疑問に思っていたことが自分だけのことでないことがわかった」、「志を共にする人が多く存在することを心強く感じた」という感想もあり、研究会の開催が関係者を結び付け、連帯意識をもたらしていることが感じられた。

個々の事例報告に関する質問 5)～7)への回答については、紙幅の関係で省筆する。最後に、質問 8)への回答の中から BUNGO-bun project への要望や提言を紹介し、プロジェクトの今後の課題を明らかにしたい。まず、研究会の継続への期待が複数の回答者から寄せられた。今後の研究会のテーマとしては、サブカルチャー、漢文教材、各国の教育現場の現状と課題、対象学生の違いによる指導法の工夫、リベラルアーツとしての古典教育研究、非母語話者の文語文習得のプロセスなどが提案された。その他、討論の時間を増やしてほしいという要望、研究会以外の形での Web 発信を考えているかという質問、Line のような形でもっと気軽に情報交換する場がほしいという意見もあった。いずれも関係者同士の情報交換の機会が増えることへの願望が反映されたコメントとして受けとめたい。

4. まとめ

以上、2021 年 2 月に「オンライン教材を考える」というテーマで開催した BUNGO-bun project 第 2 回研究会について、その概要と参加者の反応を報告した。非母語話者を対象

とする文語文教育において、特に日本研究を目指す学習者に対しては系統的な文語文法の指導が必要であることが指摘され、オンライン教材を含め有用な教材の開発が評価されまた期待されていることが明らかになった。非母語話者に対する文語文教育については、他にも漢文教育、くずし字教育など、検討を要する事項が少なくない。今後もネットワークの拡大・定着に努めつつ、様々なテーマの研究会を開催していく計画である。

（佐藤勢紀子さとうせきこ・東北多文化アカデミー）

付記

本短信で報告した研究会は、基盤研究(C)20K00720「非母語話者の文語文学習支援のためのシラバス・教授法の開発および研修システムの構築」（2020 年度～2022 年度）による助成を受けて開催した。また、共催の東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センターによる支援をいただいた。

注

1. 非母語話者に対する文語文教育の関係者のメールアドレスリスト。2021 年 2 月末の時点で 34 名が登録している。3 月の更新後の登録者は 55 名以上になる見込みである。
2. なお、国・地域別では、日本、中国、台湾、韓国、ロシア、スイス、フランス、イタリア、スロベニア、エジプト、米国、カナダの 12 の国・地域からの参加があった。
3. 同教材の公開後の URL は https://bungobungo.jp である。
4. http://www.fjweb.fju.edu.tw/yang/classic/index1.htm
5. 楊錦昌氏の日本古典教育の詳細については楊（2016）を参照されたい。
6. 楊暁捷氏のサイト http://emaki-japan.blogspot.com/ から同教材にアクセスすることができる。また、同教材の開発の詳細については Yi(2002)を参照されたい。
7. 主催側の 2 名を除く参加者 58 名と録画視聴者 4 名。
8. メールによる 4 名の回答は無記名ではないため、3)の満足度のデータからは外した。

参考文献

佐藤勢紀子（2015a）「文語文を学ぶ日本語学習者が困難を感じる点―非漢字系日本学研究者に聞く―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』1, 163-172.

佐藤勢紀子（2015b）「文語文を学ぶ漢字系学習者が困難を感じる点―中国・台湾の日本学研究者に聞く―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』7, 25-32.

佐藤勢紀子・虫明美喜・角南北斗・金山泰子（近刊 a）「e-learning 教材 “BUNGO-bun GO!”の評価―留学生を対象とする文語文関連授業での試用を通じて―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』7.

佐藤勢紀子・虫明美喜・小野桂子・金山泰子（近刊 b）「非母語話者の文語文学習のためのオンライン授業―BUNGO-bun project 第 1 回研究会報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』6.

楊錦昌（2016）『時代に適応した日本「古典」文学教育』尚昂文化.

Yi, Kang-Min (2002) Feasibility of Kobun On-line.
＜https://www.nier.go.jp/saka/cas2002/0041.html＞（2021 年 2 月 27 日閲覧）